

看護系大学教員の教育力向上に向けた研修の効果

藤井徹也 大島弓子 為永義憲
西澤和義 笹木りゆこ 佐々木詩子
柴田真由子 松本尚子 山根友絵
中島怜子

抄録

本学看護学科では、看護系大学教員を対象とした実習評価に関する研修会を企画・実施した。研修会の企画・実施にあたり、本学看護学科の教員20名がプロジェクトメンバーとして参加した。中部地区の看護系大学41大学に案内を行い、48名の参加があった。研修会では、実習評価およびルーブリック評価に関する講義を行い、その後グループワークにおいてルーブリック評価表の一部分の評価基準の作成を試みた。グループワークでは、作成過程でポイントとなる点が話し合われ、研修会アンケートでも、講義内容が「参考になった」37名(80.4%)、グループワークが「効果的であった」36名(78.3%)と回答割合が高かったため、参加者にとって有意義な研修会になったと考える。さらにアンケート回答者全員が今後の企画継続を希望しており、このような研修会の場を定期的に提供することで、教員の教育力の向上や、妥当性のある実習評価につながることを期待される。

キーワード：看護学実習，評価，研修会，効果

I. はじめに

中央教育審議会(2012)は、現代の大学生に対して、生涯学ぶ習慣や主体的に考える力を持ち、予測困難な時代の中で、どんな状況にも対応できる多様な人材となることを求めている。そのために、学士課程教育では、課題解決型の能動的学修(アクティブ・ラーニング)によって、学生の思考力や表現力を引き出し、その知性を鍛える教育が必要とされている。同時に、大学教育における質保証のため、学修成果の可視化が求められている。その学修成果を評価する方法の一つとして、パフォーマンス評価に有効なルーブリックの活用が挙げられている。

看護基礎教育における臨地実習は看護実践能力の修得のため重要な授業として位置づけられている。臨地実習では学生により実習で受け持つ対象者が異なるため、学生が経験できる内容にも差があり、かつ、複雑で多様な要件を含むことから、学生の学修成果を評価することは非常に難しい現状にある。そのことから、評価の明確な基準が示されるルーブリック評価は、臨地実習においても妥当性のある有効な評価ツールとなる。実際に、中央教育審議会(2012)の報告後から、看護学実習におけるルーブリックを用いた実習評価の報告が散見され、ルーブリッ

クによる実習評価表の作成・導入の取り組み（古城他,2013:岡山他,2015）や、学生自己評価と教員評価の比較によるルーブリック実習評価表の有用性の検討が行われている（横井他,2017）。

一方、厚生労働省（2010）の「今後の看護教員のあり方に関する検討報告会」では、看護教員に求められる能力として「臨地実習の中で学習を積み重ねていく学生等を形式的に評価する能力」を挙げている。今城ら（2015）の看護系大学で実習指導を担当する助教・助手を対象とした全国調査では、教育経験が3年未満の助教・助手178名中、132名（74.2%）が臨床経験5年以上の教員であったことが報告されている。このことから、臨床経験はある一方で、教育経験は少ない教員が実習指導を担当する現状がある。大井ら（2018）は、成人看護論実習のルーブリック評価を作成することにより、教員間で異なる評価基準であった内容が整理され、妥当性のある評価基準の作成に繋がったことを報告している。このことから、ルーブリック評価は、教育経験の少ない教員にも、妥当性のある評価が行える有効な評価方法になると考えられる。

本学看護学科では、これまでカリキュラム評価やアセスメント・ポリシー策定などを行い、教育の見直しや新たな改革に取り組んできた。その過程の中で、複数教員で担当する科目のルーブリック評価の作成を行い、その内容・成果を学会の交流セッションをとおして、看護基礎教育に携わる教員へ伝えてきた。また、その後、看護学実習におけるルーブリック評価の有用性についても検討した。そこで今回は、看護系大学教員を対象に実習評価に用いるルーブリック評価の検討を通して、改めて妥当性のある看護学実習評価のあり方について考察する機会とするため、研修会を企画・実施したので、ここに報告する。さらに、本稿では今回の研修会での討議内容や参加者からのアンケート結果を振り返り、看護学実習評価に関する研修会の効果および意義についても検討する。

II. 研修会の企画・準備過程

1. 研修会の目的

看護学実習評価に用いるルーブリック評価表の作成を参加者とともに試みることで、ルーブリック評価の有用性や妥当性のある看護学実習評価のあり方について検討する機会とする。さらにそれらの検討を通して、看護系大学教員の教育力向上を図ることもねらいとする。

2. 研修会内容の検討

学内メールで本研修会の目的を伝え、プロジェクトメンバーとして参加する意思のある者を募集し、20名の教員がプロジェクトメンバー（以下、メンバー）として参加した。

メンバー間で研修会開催に向けて検討会議（6回）を行った。具体的な内容を以下に示す。

1) 日程と場所

日程は2018年2月17日に開催し、場所は、参加者の交通利便性を考え、名古屋駅近く（徒歩5分）の会議室とした。

2) 研修会のプログラム

研修会テーマは「看護系大学教員の教育力向上に向けて——妥当性のある看護学実習評価のあり方——」とした。研修会で行う具体的な内容は、第1部で実習評価、ルーブリック評価について講義をすることとした。次に第2部において、実際に実習評価におけるルーブリック評価表の一部分の作成を試みるグループワークを行うこととした。

3) グループワークの計画

(1) 実習のルーブリック評価表作成（グループワーク教材作成）

メンバーの所属する領域実習のルーブリック評価表を作成することとした。各領域の実習目標を基にルーブリック評価表の原案を作成し、領域内で検討を行った上で、メンバー間でも内容の検討を行った。ルーブリック評価表作成時に統一したことは、①実習目標（評価項目）を本学のディプロマポリシーに対応させながら検討を行う、②評価の段階は、3～5段階評価とする（0点は設定しない）、③各段階に点数の幅を持たせずに点数を設定する、④抽象度の高い表現はしない、とした。また、グループワーク時に用いる教材として、領域ごとにルーブリック評価基準の参考例を示し、グループワークで検討したい1～2項目を空欄で示すこととした（表1）。

(2) グループワークのメンバー編成

事前に申込みのあった参加者を同じ専門領域内でグループワークができるようグループ編成を行った。1グループ6～8名の人数配置とし、計7グループとした。

(3) ファシリテーターの配置と役割について

ファシリテーターは各グループに専門領域の教員を2名配置した。ファシリテーターの主な役割は、グループワークの検討内容が今回目的としている評価基準の作成となるよう、グループワークの進行を行うこととした。内1名は、グループワーク内容の書記担当とした。また、グループワークが円滑に運営できるようファシリテーター間で役割を事前に確認した。

4) 研修会当日の運営担当者

全体のとりまとめ2名、受付2名、会場案内2名、パソコン・照明1名、マイク・写真2名、その他3名とした。

5) アンケート作成

研修会の効果や課題等を検討するため、参加理由や講義、グループワークの内容等に関するアンケートを作成した。

6) 受講修了証の作成

参加者に対して、本学の看護学科長名を入れた受講修了証を渡すこととした。

表1. グループワークで用いたルーブリック評価表例（基礎看護学実習Ⅰの場合）

実習の達成目標	評価基準	1	2	3	4	5
	評価項目 (指標)					
1. 患者が24時間過ごす療養環境とその過ごし方を知ることができる。 (10点)	患者の病室環境（病室の広さ・構造・設備、温度・湿度、採光・照明、騒音、臭い、患者を取り巻く人的環境、プライバシーなど）を知ることができる。	グループワークで取り組む項目				
	患者が療養生活をする中で困っていること、辛いと感じていること、辛いと気づくことができる。	グループワークで取り組む項目				
2. 患者が療養することによって困っていること、辛いと感じていること、辛いと気づくことができる。また、この気づきをおして看護ケアの必要性を考えることができる。 (20点)	患者が療養生活をする中で困っていること、辛いと感じていること、辛いと気づくことができる。	グループワークで取り組む項目				
		評価基準参考例				
3. 既修の知識・技術（生活の援助技術、コミュニケーション技術）を用いながら看護ケアの一部を指導者とともに実施することができる。 (5点)	既修の知識・技術を用いながら看護ケアの一部を指導者とともに実施することができる。	看護師が行うケアを見学又は指導者とともにケアの一部を実施することができるが、既修の知識により実施する技術の目的や方法を十分述べることができない。		既修の知識により行なう技術の目的や方法を述べることができる。それに基づいて看護ケアの一部を指導者とともに実施することができる。		既修の知識により行なう技術の目的や方法を述べることができる。それに基づいて看護ケアの一部を指導者とともに実践することができる。更にケアについて疑問や気づきを持ち発言することができる。

3. 広報活動及び参加者募集

他大学への研修会開催の連絡は、研修会案内ポスターを作成し、2017年12月5日に中部地区の41大学に発送をした(表2)。また、同日より本学ホームページ上でも研修会開催の案内の公開を開始した。2018年1月10日時点で参加者数が定員に達していなかったため、2018年1月11日に研修会案内ポスターを前回送付した41大学に再度発送し、愛知看護系大学連絡協議会開催時にも研修会開催の案内を行った。

研修会の申込受付はメールで行い、申込時には、氏名、所属大学、担当領域、連絡先を記載するよう求めた。研修会開催前日までの申込者数は愛知県38名、岐阜県7名、静岡県6名、長野県4名、福井県2名、大阪府1名であった。当日参加申込者(愛知県1名)があり、合わせて計59名となった。研修会の案内をしていない大阪府より1名の申込みがあったが、これは知人から研修会開催について情報を得たためであった。また、申込者の中に大学教員ではなく、博士前期課程の大学院生が1名いたが、研究分野が看護教育学であったことを考慮し、申込みを受付けた。

表2. 都道府県別送付大学数

都道府県	国立	公立	私立	合計
愛知県	1	2	9	12
岐阜県	1	1	5	7
三重県	1	1	2	4
静岡県	1	1	4	6
長野県	1	1	1	3
福井県	1	2	1	4
石川県	1	1	2	4
富山県	1	0	0	1
合計	8	9	24	41

Ⅲ. 研修会の実施

1. 研修会参加者

研修会の参加者数は48名であった。研修会前日からの全国各地の雪による悪天候の影響で11名のキャンセルがあったため、グループ編成を変更して対応し、各グループ参加者4～9名とした。大学設置区分別では私立大学の教員の参加が多かった(表3)。担当領域別では基礎看護学領域の参加が21名で最も多く、次いで老年看護学、成人看護学領域であった(表4)。

表3. 大学設置区分別参加数

(単位:人)	
大学設置区分	参加数
国立大学	6
公立大学	5
私立大学	37
合計	48

表4. 担当領域別参加数

(単位:人)	
担当領域	参加数
基礎看護学(看護管理, 看護教育学含む)	21
老年看護学	10
成人看護学(急性期, 慢性期)	9
小児看護学	2
母性看護学(性生殖看護含む)	2
精神看護学	2
在宅看護学	2
合計	48

2. 当日のスケジュール

研修会の第1部では、「実習評価とは」「ルーブリック評価とは」について講義を行った。「実習評価とは」の講義では、看護学教育における評価の難しさ、特に実習における評価の問題点を示し、妥当性のある評価の必要性について共通理解した。「ルーブリック評価とは」の講義では、基本的なルーブリックの構造を示し、実習評価に活用することの意義について説明を行った。第2部のグループワークでは、領域ごとに作成したルーブリック評価基準の参考例をもとに、評価項目の一部についてグループで検討し、評価基準の作成を試みた。その後、全グループの発表と質疑応答、全体のまとめを行い、最後に参加者全員に修了証の授与を行った(表5)。

表5. 当日のタイムスケジュール

時間	項目	内容
12:30	受付開始	
13:00	開会 研修会趣旨説明	
13:10	第1部: 講演	1. 実習評価とは 講師: 大島弓子(豊橋創造大学保健医療学部看護学科 学科長) 2. ルーブリック評価とは 講師: 蒔田寛子(豊橋創造大学保健医療学部看護学科 教授)
14:10	休憩	
14:20	第2部: グループワーク	1. グループワーク(約60分) 実習評価に用いるルーブリック評価表の一部分をグループで検討 2. 発表(約30分)
15:50	全体のまとめ 質疑応答 修了証の授与	
16:00	閉会	

3. グループワークの実施

グループワークは領域ごとに7グループ(基礎看護学3グループ, 成人看護学(慢性), 在宅・老年看護学, 精神看護学, 小児・母性看護学)に分かれて実施した。ファシリテーターから実習時期, 大まかな実習内容等について説明を行った後に, グループでの討議を開始した。

IV. 研修会の評価

1. グループワークでの討議内容

グループワークの書記の記録をもとに、討議内容を分類したところ、「評価基準の作成手順」、「評価基準のレベル設定」、「評価基準の内容」、「評価の判断材料」、「評価基準の表現」、「達成目標の見直し」、「ルーブリック評価を使用することの意義」、「実習評価における課題」に分類された(表6)。

表6. グループワークでの討議内容

評価基準の作成手順	作成に取り掛かる際にどの評価基準の内容から検討をしていけばよいか 到達点を明らかにすることが重要であるため、レベル5(最も高いレベル)から検討した 最も高いレベルと低いレベルを決定し、その間を段階的にきめていくとよい
評価基準のレベル設定	評価基準5や1はどれくらいのレベルを設定すればよいか 最低限の到達レベルを評価基準のどこにもってくるか スタンダードのレベルをどのような基準とするのか 最高レベルの評価基準は到達目標より、さらに上の段階の基準にしてもよいのではないか 評価基準の3が60点の「可」となるレベルに、学生の標準レベルが4の位置づけになるようにした
評価基準の内容	評価基準の内容に複数の視点が入ってもよいか 一つの項目に要素を詰め込みすぎないようにする必要がある 必要と考える項目の記入数により点数化して、どれだけ気づけたかという量的視点での評価 どのような気づきをしたかという質的視点での評価 評価基準は指導状況や学生の自立度などは含めず、あくまで学生の到達度に視点をおき作成する
評価の判断材料	学生の記録物、看護実践、カンファレンスでの発言内容、振り返り時の発言などを材料にする 何で学生の達成状況について判断していくのか明確にした方が評価の妥当性が担保できる
評価基準の表現	学生に提示することを考慮して評価基準を記述しなければならない 評価の要素および評価基準の記述はどのようにすれば学生にも分かりやすく伝わるか 表現は具体的かつわかりやすいことが重要である
達成目標の見直し	達成目標のクリティークや見直し 達成目標を検討することの必要性
ルーブリック評価を使用することの意義	ルーブリックの活用において学生と評価を共有することの意義について意見が一致した
実習評価における課題	教員数や実習の指導体制によって学生に求めることが変わってきてしまう現状がある 実習の初期と後半では、経験の差が加味されないで評価されることをどう考えるか

2. 参加者によるアンケート結果

参加者にはアンケートの趣旨および報告書等で公表することを伝えた上で、回答は無記名かつ任意であることを、研修会当日に口頭で説明した。参加者 48 名中、アンケート回収数は 46 名 (95.3%)、有効回答数は 46 名 (95.3%) であった。

1) 研修参加理由

参加した理由については、「ルーブリック評価に関心があったから」が 27 名 (58.7%) と最も多く、次に「実習評価に困っているから」、「他大学の实習評価に興味があるから」が 21 名 (45.7%)、12 名 (26.1%) であった (図 1)。

2) 講義内容について

講義内容については、「参考になった」が 37 名 (80.4%)、「やや参考になった」が 9 名 (19.6%) であった (図 2)。

3) グループワークの効果について

グループワークの効果については、「効果的であった」が 36 名 (78.3%)、「やや効果的であった」が 7 名 (15.2%) の順であった (図 3)。

4) ルーブリック評価ツール活用の可能性

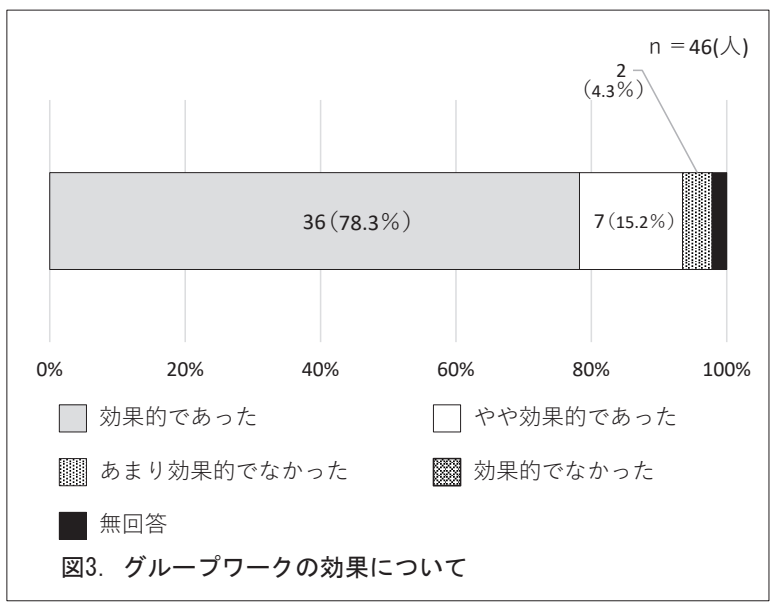
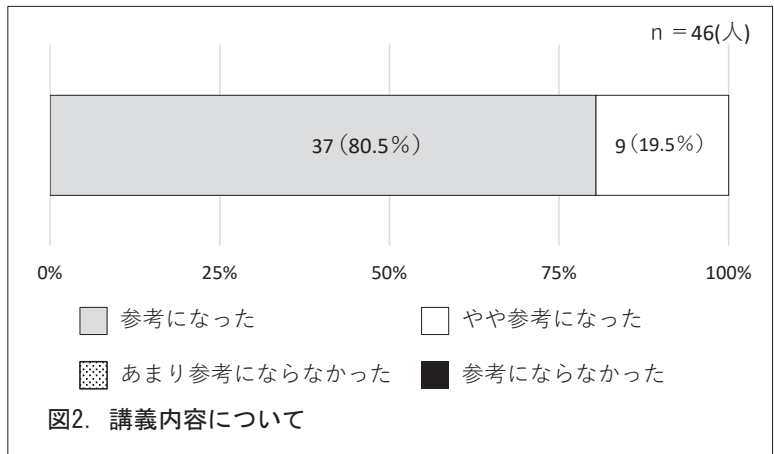
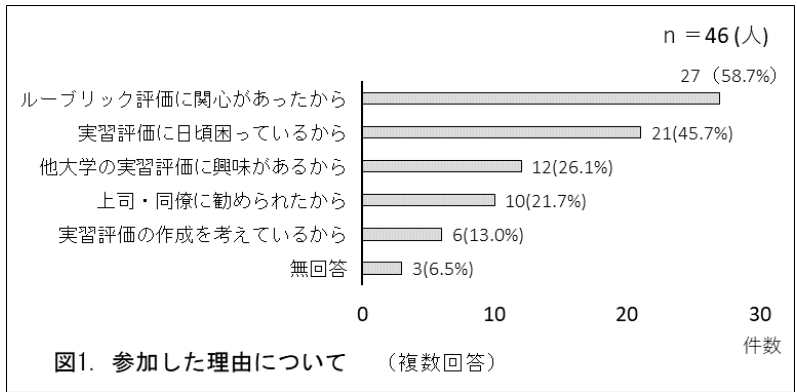
ルーブリック評価ツール活用の可能性については、「そう思う」28 名 (61.0%)、「ややそう思う」17 名 (37.0%) であった (図 4)。

5) 今後の企画継続の希望について

企画継続の希望については、46 名 (100%) が「希望する」と回答した。

6) 研修会の感想、意見など (自由記載)

グループワーク、研修全般について多くの意見がみられた (表 7)。グループワークでは、「領域が同じで共通する内容で話しやすかった」、「他大学の教員と交流・情報交換 (実習の時期・実習状況他) ができてよかった」との意見が複数みられた。研修全般において、「自己の実習評価の振り返りの機会となった」、「有意義であった」との意見が複数みられた。



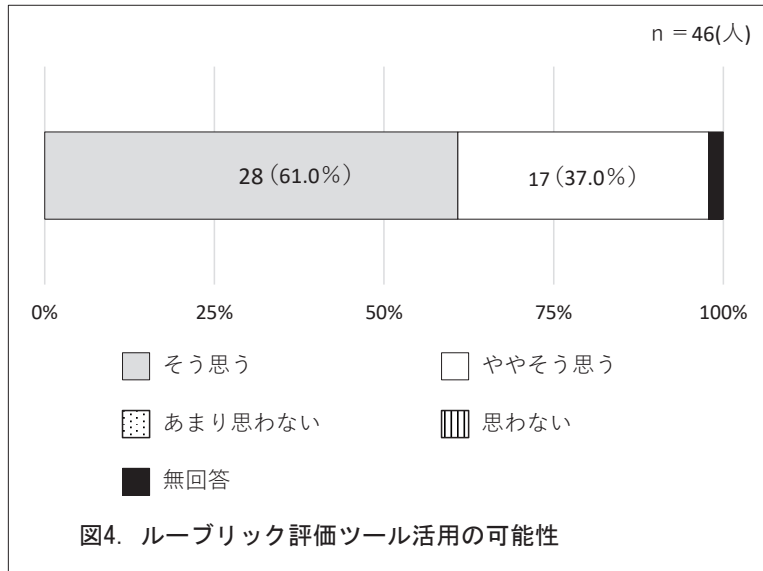


表7. 研修会の感想, 意見など (自由記載)

()複数回答件数

講義
講義が理解しやすかった
グループワーク
他大学の教員と交流・情報交換(実習の時期・実習状況他)ができてよかった(7)
領域が同じで共通する内容で話しやすかった(7)
グループワークにファシリテーターが関わって頂き話しやすかった
グループワークが有意義であった, いい意見を聞くことができた
評価基準を考える視点を知ることができ参考になった
作成までには至らなかったが, ルーブリックのポイントがわかった
ルーブリックの作成過程で教員間共通理解できた
研修全般
自己の実習評価の振り返りの機会となった(3)
1日研修でも良かった, 勉強になった
実習のあり方についても考えさせられた
ルーブリック評価が初心者でもわかりやすく, 有意義であった
他領域のルーブリック評価の活用例をもう少し知りたかった
学生の成績になるので評価基準が学生に理解できると良い
名古屋駅近くでアクセスが良かった
今後の展望
実習評価が評価者の主観に左右されることなく公平につけられるためのツールとして活用していきたい
今後自己の実習評価に役立てたい
今後の企画
継続的にルーブリック評価についても学べるように企画してほしい(4)
ICEモデルを取り入れている実践例について聞きたい
論文の査読の指標について企画して頂きたい

V. まとめ

1. グループワークでの討議を通しての研修効果

第1部でのルーブリックに関する講義の内容を踏まえ、グループワークでは本学看護学科における各領域実習のルーブリック評価表を用いて、その一部分の作成を試みた。ルーブリックの構成要素は、評価観点や評価基準、評価手段等とされている(沖,2014;大井他,2018)。今回のグループワークにおいても、作成過程でポイントとなる「評価基準のレベル設定」、「評価基準の内容」などを中心に検討が進められた。これまでにルーブリック作成や活用経験のない参加者がみられたこと、また時間的制約もあり、提示していた部分のすべてを作成するには難しい側面もあった。しかし、ルーブリック評価表の作成を最終成果物とするのではなく、作成過程におけるポイントや実習評価の方法などについて、各グループのファシリテーターが中心となり討議を進めたことで、各々の教育実践を踏まえた活発な意見交換が行われた。アンケート結果からは「作成までには至らなかったが、ルーブリックのポイントがわかった」、「評価基準を考える視点を知ることができ、参考になった」などの意見がみられた。このことから今回の講義や討議は、参加者にとってルーブリックの基本や作成方法、作成手順に関する理解の一助になったと考えられる。作成過程を共有するグループワークをすることで、参加者にとっても、ファシリテーターにとっても、能動的な学び合いが出来るものと思われる。

また、大井ら(2018)は、ルーブリックの作成はその評価に関わるものがお互いに納得するまで評価基準や尺度を話し合うことで、評価そのものの具体的なイメージを共有したり、相互の実習評価に関する価値観に気づくこともできると報告している。今回は様々な大学の教員が一同に会した研修会であり、各大学の实習方法や内容が異なる状況の中で、できる限り効果的な討議となるようグループを同じ領域の教員で構成した。アンケートの自由記載内容では「領域が同じで共通する内容で話しやすかった」との意見もみられ、各領域における実習の特性を踏まえたディスカッションが行われ、実習評価に関する具体的なイメージや課題について共通認識を図ることに繋がったと考える。

一方、今回のグループワークでは、本学科の実習のルーブリック評価表を検討材料としたことで、実習の状況や目標の解釈などグループ間でコンセンサスを得ることに時間を要した。このことは、グループワーク開始前のオリエンテーションで、参加者の理解の確認を行わなかった点が要因として考えられる。今後は、実習評価を討議する上で必要な情報の提示を行うことや参加者にグループワークの目的の理解を促す必要があると考える。しかしながら、各グループのファシリテーターがその役割を果たしたことで、討議は効果的に進められたと考える。アンケート結果では78.3%の参加者が「グループワークが効果的であった」と答え、また自由記載内容では「自己の実習評価の振り返りの機会となった」、「実習のあり方についても考えさせられた」との意見もみられた。このように今回のグループワークでの討議を通じて、参加者それぞれが実習評価を見直す機会にもなったと考えられる。

2. 看護学実習評価に関する研修会の重要性

研修の参加理由として「ルーブリック評価に関心があった」が27名(58.7%)と最も多かった。中央教育審議会(2012)の報告後、ルーブリックによる実習評価表の作成・導入の取り組み(古

城他,2013; 岡山他,2015) や、学生自己評価と教員評価の比較によるルーブリック実習評価表の有用性の検討(横井他,2017)などの報告が散見されるようになり、今回の参加者のアンケート結果からも看護学におけるルーブリックを用いた実習評価は、教員にとって関心の高い内容であることが窺える。また、アンケートでは、看護学における実習評価、ルーブリック評価に関する講義内容については「参考になった」「やや参考になった」と全員が回答し、グループワークでは、「効果的であった」「やや効果的であった」と43名(93.5%)が回答したことから有意義な研修会になったと考える。

さらに、今後ルーブリック評価のツールを活用する可能性について、45名(98.0%)の参加者が「そう思う」「ややそう思う」と答えた。また自由記載内容では「実習評価が評価者の主観に左右されることなく公平につけられるためのツールとして活用していきたい」、「今後自己の実習評価に役立てたい」との意見もみられた。第1部の講義でもあったように看護学教育はその評価の難しさがあり、特に実習における評価には、様々な問題点が存在する。そのような中、妥当性のある評価ツールとして、ルーブリック評価は有用であるとの共通認識が図れ、今後各大学での導入が期待される結果となった。

また、今城ら(2015)の看護系大学の新人教員178名を分析対象とした調査では、約4割が実習上のなんらかのサポートが得られていないと回答している。今回のアンケートでも、「実習評価に困っている」と21名(45.7%)が回答し、教員は日頃から実習評価に課題を抱えていた。一方で、自由記載内容では、自己の実習評価の振り返りの機会となったことや、他大学の教員との交流ができてよかったという意見が複数みられた。このことから、地域の大学を集めて研修会を行ったことにより、ルーブリック評価のみでなく、他大学の実習指導・評価等について情報交換できたことは有意義な研修会となった要因の一つと考えられる。さらに、アンケート回答者全員が企画継続を希望していた。中央教育審議会(2012)は学修評価手法の研究・開発とともに、評価に関する専門的な知見の普及・共有の方法の検討の必要性を述べている。今回の研修会は、実習評価に関する知見の普及・共有に効果的であったと考えられ、このような研修会の場を定期的に提供していくことで、教員の教育力の向上や、妥当性のある実習評価に繋がると期待される。

謝辞

中部地区の看護系大学において、実習指導を担当する多くの教職員の方に研修会に参加していただき、活発な意見交換等、有意義な時間を過ごすことができたことに感謝いたします。また、本研修にご協力いただきました豊橋創造大学保健医療学部看護学科プロジェクトメンバーの皆様へ心より感謝いたします。

本研究は、平成29年度豊橋創造大学学長裁量枠経費により実施した。

<引用文献>

- 中央教育審議会大学分科会 大学教育部会,予測困難な時代において生涯学び続け,主体的に考える力を育成する大学へ(審議まとめ),http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2012/04/02/1319185_1.pdf.(閲覧日2018.10.31)
- 今城仁美,古城幸子,看護学実習指導を担う看護系大学新人教員の現状,新見公立大学紀要,36巻,2015,131-134.
- 厚生労働省,今後の看護教員のあり方に関する検討会報告書,<https://www.mhlw.go.jp/shingi/2010/02/dl/s0217-7b.pdf>.(閲覧日2018.10.31)
- 古城幸子,木下香織,老年看護学実習の教育評価にルーブリック評価表を導入して,新見公立大学紀要,34巻,2013,15-20.
- 岡山加奈,荻あや子,高林範子 他,既存の基礎看護学実習評価表の課題とルーブリックを用いた評価表の提案,岡山県立大学保健福祉学部紀要,21巻,2015,9-16.
- 沖裕貴,大学におけるルーブリック評価導入の実際 公平で客観的かつ厳格な成績評価を目指して,立命館高等教育研究,14号,2014,71-90.
- 大井千鶴,諸田直実,今泉郷子 他,成人看護論実習評価におけるルーブリック作成過程の実際.武蔵野大学看護学研究紀要,12号,2018,49-55.
- 横井和美,伊藤あゆみ,生田宴里 他,成人看護学実習にルーブリック評価を活用したことの有用性 学生自己評価と教員評価との関連からの検討,日本看護学教育学会誌,26巻,3号,2017,13-24.